姶良市モラリティ・インプルーブメント推進事業啓発資料

令和7年度

『心を紡ぐ』

第12回「ことばのいずみ」スピーチコンテスト

第3回 ハートフルメッセージコンテスト　より

姶良市教育委員会　編集

☆　姶良市「モラリティ・インプルーブメント推進事業」について

モラリティ・インプルーブメント推進事業は、学校・家庭・地域が協力して、思いやりや感謝の心などの子どもたちの道徳性を高めていく働きかけを意図的・計画的に行っていこうとする事業です。道徳性が高まっていくことで、「自分を伸ばし、他人を思いやり、よりよい社会をつくっていこうとする心をもち、そして行動できる人」に成長していけるようにしようという取組です。

（モラリティ＝道徳性、インプルーブメント＝向上）

※ 子どもたちの道徳性を高めていく中で、確かな自立へ導き、社会（公共）に貢献できる人づくりを社会全体で協働して取り組んでいこうとする事業で、姶良市子育て基本条例を具体化するものです。

取組の重点

◎ 学校における道徳教育をもっと充実・推進しよう。
◎ 学校・家庭・地域が協働して子どもたちの道徳性を育成しよう。

学校における道徳教育の充実・推進のための取組

指導力を高める研修会の実施
- ◎ 学級経営研修会
- ◎ 道徳教育推進教師研修会

道徳授業を充実させる指導方法や教材の開発
- ◎ 道徳科指導法開発委員会

市民と一体となった道徳教育の推進のための取組

家庭・地域の道徳教育に対する関心及び参画意識の向上
- ◎ 教育フォーラム「ハートフルあいらんど」

市民の互いを思いやる気持ちの啓発
- ◎ ハートフルメッセージコンテスト

市民への重点指針を啓発
- ◎ みんなのカレンダー　◎ 「心を紡ぐ」

協働

研究実践校による家庭・地域と協働した取組の推進（小学校：毎年1校、中学校：隔年で1校）
- ◎ 道徳性を高めるための、学校・家庭・地域と協働した取組の公開
- ◎ 家庭・地域への「道徳授業」の公開
- ◎ 学校・家庭・地域による子どもの道徳性についての協議

学校・家庭・地域が、協働して子どもの道徳性を育むために、どのような取組が必要かを考える協議会の設置

本誌では、「『ことばのいずみ』スピーチコンテスト」や「ハートフルメッセージコンテスト」の優秀作品を紹介しています。

「『ことばのいずみ』スピーチコンテスト」は、「あいさつ」「規則の尊重」「感謝の心」「郷土愛」「夢・志」をテーマとして、小学校4～6年生、中学校1・2年生、高等学校1・2年生を対象に作文を募集しました。第1次審査で優秀作品に選ばれた9名が10月に行われた「ハートフルあいらんど」の中で、最終スピーチを行ってくれました。どの児童生徒も自分の思いを精一杯伝える素晴らしい発表をしてくれました。その中で、最優秀賞に選ばれた3作品を掲載しています。

また、「ハートフルメッセージコンテスト」は、姶良市内に在住の 18 歳以上の方を対象に感謝の気持ちを表現した手紙を募集しました。どの作品も、大切な方への感謝の気持ちがあふれる素晴らしい作品ばかりでした。その中の3作品を掲載しています。

作者の思いがみなさんの心にも届いたら嬉しいです。なお、原文の趣旨を損なわない範囲で、編集部にて一部表記を整えて掲載しております。

～ 「ことばのいずみ」スピーチコンテスト 【小学生の部】 最優秀賞作品 ～

やさしいことば

「ほのかはよくがんばったよ。」

お父さんとお母さんは、わたしが何かにちょうせんしてうまくいったときもそうじゃないときも、このことばをかけていつもほめてくれます。今年の夏休み、このことばにはたくさんの思いがこめられていることを知ることができました。

夏休みの宿題を終わらせて、家でゆっくりしていると、お父さんから、「穂乃佳が生まれたときの動画があるけど見てみる。」と言われました。「うん。」元気よく返事をして、パソコンの前にすわりました。わくわくした気持ちで動画をさい生してみると、

「リリリ。リリリ。ピンポン。ピンポン。」

というむねがドキドキするような音のなかで、たくさんの機械にかこまれながらちりょうを受けてねむっている赤ちゃんがうつっていました。わたしはその赤ちゃんが自分だと思うことができなくて、しばらく動くことができませんでした。「かわいそう。」思わず声が出ました。 そして、気がついたら、むねがいっぱいになって、なみだがとまらなくなってしまいました。「動画を見て、穂乃佳はどんな気持ちになった。」お父さんから聞かれましたが、うまく説明することができませんでした。

そんな様子を見ていたお母さんから、生まれたばかりのわたしはしばらく息をしなかったこと、きゅうきゅう車で市立病院に運ばれて二週間も目をさまさずに、集中ちりょう室で一か月間のちりょうを受けたこと、わたしをうんだあとすぐにお母さんが車いすでわたしがいる病院まで会いにきてくれたこと、お父さんが仕事が終わった後に毎日病院にきてわたしの動画をさつえいして入院しているお母さんにとどけてくれたこと、お医者さんやかんごしさんたちが「一日でも早くほのかちゃんをおうちに帰してあげよう」といって大へんなちりょうにあたってくれたことなどたくさんのことを教えてもらいました。そして、動画を見終わったときにお父さんが「でも、一番がんばったのはほのかだよ。小さい体でよくがんばったね。」と言ってくれました。そのことばを聞いて、わたしは、いつもお父さんとお母さんが言ってくれる「ほのかはよくがんばったよ」ということばの意味が分かった気がしました。お父さんとお母さんは心の中にいるうまれたときのわたしに対しても、そのことばをずっとかけ続けてくれているんだと思いました。

「みんなありがとう。」

わたしを助けてくれた人たちに対して、しぜんとことばが出ました。そのことばを聞いていたお母さんも、「そうだね」とやさしい顔で言いました。

わたしはこれまで、当たり前のように学校に行ってお友達とお話をして、ご飯を食べたり遊びに行ったりしていましたが、たくさんの人に助けられて今日をすごせていることが分かりました。

これからはお父さんやお母さん、家族のみんな、お友達が大へんなとき、いやな思いをしているときには、お父さんとお母さんがいつも「よくがんばったね。」とことばをかけてくれるように、わたしもやさしいことばをかけてあげられるようになりたいです。

「ことばのいずみ」スピーチコンテスト【中学生の部】最優秀賞作品 ～

当たり前の生活のありがたさ

八月八日、鹿児島県で大雨が降り、大きな被害が出ました。私の住む重富でも川が氾濫し道路が水に浸かり、家の中まで水が入りました。いつもと同じ町の景色が一気に変わってしまい、とても怖くて信じられませんでした。自然の力の強さを身近に感じたのは初めてでした。

私の家でも水道が止まり、五日間も水が使えない生活をしました。飲み水や料理に使う水はもちろん、顔を洗ったりお風呂に入ったりすることもできず、不便を強く感じました。ペットボトルの水や給水所で配られる水のありがたさを、身をもって感じました。普段は当たり前にある水道が、こんなに大切なものだとは思っていませんでした。

母が運営しているNPOの活動も行い、自分のカフェでお弁当を作り、復旧作業をしている人たちに届けていました。私もその姿を見て「手伝いたい」と思い、一緒に行動しました。現地に行ってみると、土砂で道路がふさがれていたり、家具や家電が外に積まれていたり、住んでいる人の疲れた顔があったりして、テレビで見るのとは全然違う現実の怖さを知りました。道路は通行止めが多く、今でもまだ通れない道があります。電車やバスも止まっていて、生活が大きく乱れていることを実感しました。

そんな中、自衛隊や消防の方々、ボランティアさんが懸命に活動している姿も見ました。泥を取り除いたり、被災した家の人に声をかけたりしている姿はとても心強く、私たちのために働いてくださっていることがありがたく感じました。普段はあまり意識しませんが、いざという時に地域を守ってくれる存在があるのは、とても心強いと思いました。お弁当を手渡ししたとき、受け取った人が「ありがとう」と笑顔を見せてくれました。その笑顔に、私の方が元気をもらった気がしました。食べ物には人を元気にする力があると改めて思いました。また、NPO の拠点としている空き家再生の建物では、井戸水があり、水をくんだり洗濯をしたりができたので地域に開放しました。断水で困っていた地域の人たちが連日あつまり、とても助かっていました。あまり知られていない場所が、このように役立つことに驚き、地域に居場所があることの大切さを知りました。

今回の体験を通して、私は三つのことを学びました。一つ目は、災害はいつ自分に起こるかわからないということです。重富は安全だと思っていましたが、実際に浸水や断水が起こって、「明日は自分の家かもしれない」と思うと不安になりました。だからこそ、日ごろから避難場所の確認や防災グッズの準備が大切だと思いました。二つ目は、普段の生活のありがたさです。水が使えないだけで生活がどれほど大変になるのかを体験しました。今まで当たり前に使っていた水や電気が、本当はとてもありがたいものだとわかりました。これからは「当たり前」の生活を、もっと大切にしていきたいです。三つ目は、人と人とのつながりの大切さです。ボランティアや地域の人が協力して復旧を進める姿を見て、「助け合うことがこんなに力になるんだ」と感じました。日ごろから地域の人と交流しておくことも、災害のときに大切だと気づきました。顔見知りの人がいるだけで安心でき、困ったときに声をかけ合えると思います。

これからも防災の意識を忘れず、地域の一員として小さなことでも協力できるようになりたいです。困っている人を見かけたら、勇気を出して手を差し伸べられる人になりたいです。

～ 「ことばのいずみ」スピーチコンテスト 【高校生の部】 最優秀賞作品 ～

人生を生き抜く

この夏、尊敬する先生が亡くなった。私の誕生を喜び、成長をずっと見守っていた、私にとって大切な方だった。その方は大迫より子という方で、鹿児島の療育の基盤をつくり、その発展に尽力してきた方だ。小学校教諭だった先生は学校を辞め、自宅で「あすなろ療育相談室」を開設した。なぜ、そのような行動を起こしたかというと、小学校で出会った支援学級に通う子どもと保護者との出会いの中で、人間の尊厳が守られていない現状を知り、自ら立ち上がったと聞いた。「絶望の子育てではなく、希望の子育てを」「どこに生まれても必要なすべての子どもたちが支援を受けられるように」「障害の有無に関わらず、誰もが安心して暮らせる街をつくりたい」等、先生は強い信念を持って、いろんな事にまっすぐに向き合い、生きてきた。母は大迫先生の下で仕事をしていたため、毎日とても忙しそうだったが、取り組んでいることを聞くたびに、大変さの中にも希望を感じ、人として大事にしなければならないことを学んだ。私が物心ついてからは、ボランティアやイベントに行く中で先生に会うことができた。先生は私に会うと優しく声をかけてくれた。先生に会う度に感じていたことがある。先生は人の心を元気にする力があり、発する言葉一つ一つに熱い思いが込められている人だと。私は自分自身のことでもそれ以外のことでも、心が熱くなることがあまりなく、ましてや、誰かのために、この社会がよりよくなるために、という思いをもって動くという意識は希薄だった。大迫より子という人を知ることによって、自分の意識や考えが少しずつ変化していったと思う。

先生が入院したことを聞いた。入院中も母と先生は連絡をとっていた。先生が自分の病気と向き合っていること、医師からの余命宣告を受けとめ、今を懸命に生きていることを知った。自分はただ心配するだけで、何もできなかった。先生は、医師から余命一週間を宣告された時、子どもたちの未来を守ってほしいと願い、この思いを引き継いでほしい人を十五名程度集めた。県外からも駆けつけていた。自分の命を懸けて一人一人と言葉を交わした。とてつもなく凄いことだと思った。私は先生が亡くなる三日前に会うことができた。母が私を連れて会いに行くことを約束していた。体調を考慮して二十分程の時間だった。私は、中島みゆきの「糸」をギターで弾き語りをした。先生は歌う前に力強く拍手をしてくれた。そして、歌の途中で、病気になってから一度も涙を見せなかった先生がはじめて涙を流した。ご家族の方も涙を流して聴いてくれた。私は途中、何度か泣きそうになりながらも、何とか最後まで歌いきることができた。私は先生に「僕は将来、先生のように地域や街づくりに携わる仕事をしたいと思っています」と伝えた。すると先生が「人づくりは街づくり、街をつくっていくことで人が育っていく」と言葉を返してくれた。私はとても大切なことを学んだ。私は、地域の活性化や暮らしやすい街をつくりたいと考えていたが、街をつくっていくことで、人が育っていくには、どのような取り組みをしたらいいのだろうか、私は大きな宿題を与えられた。

母と先生は奇跡的に亡くなった当日に会うことができた。母が帰ることを伝えると、先生は大きく目を開けて「ありがとう」と言われた。母はこの「ありがとう」の言葉は自分にだけではなく、出会った人みんなに向けた言葉だったと涙を流しながら教えてくれた。先生は自分の人生を全うした方だと思う。先生が自分の人生を最後まで精一杯生き抜いたように、人生をどう生きるのか、まずは自分自身と向き合い、自分なりの答えを見つけていきたい。

～「第3回　ハートフルメッセージコンテスト」入賞作品より　～

本コンテストでは、言葉にして伝えることができなかった感謝の気持ちを手紙として応募いただきました。地域の方に宛てた手紙、子どもに宛てた手紙、親に宛てた手紙、大切な方に宛てた手紙…どの作品も“ありがとう”の気持ちがあふれる素敵な手紙ばかりでした。大切な誰かに宛てた“ありがとう”の思いは、読む人も温かな気持ちにしてくれます。今年度の応募作品から、入賞作品を紹介します。

来年度は、7月下旬から9月上旬にかけて、案内をする予定です。次回は、あなたの感謝の気持ちを手紙にしてみませんか。

【 最優秀賞作品 】　**あの日助けて下さった皆様へ**

私たち家族は 2025 年春に姶良に新築の家を建て、引っ越してきました。春に赤ちゃんも産まれ、地元もこちらではなく、親戚や知り合いもいない状態で、8月の姶良豪雨災害を経験しました。

あの日は夜中から凄い雷雨で、夜が明けて外に出ると、目の前の道路が川になっていました。初めてみる光景に唖然としたのを覚えています。水も止まり、庭にも土砂が流れてきて、何から手をつけて良いかわからない状態の中、自治会をはじめ、地域の住民の方々が、災害ゴミの出し方、配水の時間などをすぐに連絡してくださり、本当に心強かったです。

近くの方が洗浄機も貸してくださり、片付けも捗りました。人と人との繋がりが薄くなってきている中で、地域の繋がりって本当に大事なんだと気付かされました。

今回は助けてもらってばかりだったので、次は私も誰かに手を差し伸べられるように念の為の備えをしっかりしておきたいと思います。

【 優秀賞作品 】　山野パトロール隊の皆さまへ

重富海岸の近く静かな町に越して来たのは、結婚して息子を授かった時でした。

無事に出産し子育てしていた頃、まず、支えてくれたご近所さん、義母の頃からのお付き合いの方々、皆さん優しく見守ってくれました。感謝しております。そして第二子女の子を授かり初めての二人の育児に奮闘する中、その中でも、やはりご近所さん義母、その母、海公園図書館等利用しました。そして娘が1年生になる頃、山野パトロール隊が発足。不安で一杯だった私。朝夕登下校時に見守り活動をして下さりました。本当に安堵したのを覚えています。

その娘も今年 28 歳。今もなお続けて下さり、また広がった見守り隊の皆さま、ありがとうございました。違う町ですが来年4月は孫が1年生。また地域の方に見守られる事を願いながら、私も今のこの町でチューリープを植えて、咲く頃いってらっしゃい！おかえりを！見守る事が出来たらなぁと思います。

【 優秀賞作品 】　高校三年生になる君へ

この前は、感情があふれてしまって、泣きながら君と向き合ったね。今までも、そういうことは何度もあった。でも、今回は少し違ったんだ。どうしても伝えたかった。君に間もなくやってくる、いちばん大切な「将来」の話を。やりたいことがよくわからないまま学年だけが上がり、とうとう現実を見なければならなくなって、焦っていたわたし。今日の予定や、浮ついたり沈んだりする日々に目が向いてしまう君に、どんなふうに言葉をかければいいのか、正直、私にもわからない。自分じゃない誰かの未来を、こんなにも真剣に考えるのは、君が初めてだから。君が好きなことは、なんですか。君がワクワクすることは、なんですか。私が作る未来じゃなくて、君自身が、自分の足で歩いていける未来について、これから一緒に考えていこう。

進路を考える前に、この想いが君に届きますように。

愛しています。母より

思いやりあふれるまちに

モラリティ・インプルーブメント推進事業
令和8年3月発行
姶良市教育委員会学校教育課